

ハンティングデール小学校 日本語イマージョンプログラム見学報告

報告者：柴田佳夏，伊藤静，林逸菁

2004年3月15日～18日

1 ハンティングデール小学校について

ハンティングデール小学校*¹ は、1954年にビクトリア州メルボルンのオークリー地区に公立小学校として設立され、1997年よりバイリンガルプログラムを開始した。現在約15%の日本人子弟を含む26か国からの生徒162名が在籍しており、日本語による多様な授業を行うと同時に、名古屋の姉妹校生徒と相互訪問を行うなどの積極的な交流を行っている。

2 イマージョンプログラムについて

2.1 概要

週7.5時間は日本語で授業を行うカリキュラムである。科目は、理科、美術、体育、音楽、社会、LOTE(日本語)がある。

2.2 クラス編成

プレップ (P - Prepare), プレップ/1年生, 1/2年生 (Hクラス・Tクラス), 3年生, 4/5年生, 5/6年生の合計7クラス。クラスは2学年複合の複式クラスになっているのがほとんどであるが、1学年単独のクラスもある。

2.3 日本語スタッフ

日本語の授業は日本人教師3名によって行われている。また、日本語バイリンガルプログラムコーディネーター1名と、日本人ボランティア・アシスタント数名により、プログラムが運営されている。

*¹ Huntingdale Primary Scholl, Grange St, Oakleigh South, VIC 3167
URL : <http://www.huntingdaleps.vic.edu.au/>

3 時間割

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
9:00-10:00	集会	5/6 美術 4/5 読書	1/2 TPMP 1/2H 日本語 P/1KBianca 3 読書	Prep PMP P/1 日本語 5/6 日本語 4/5 日本語	1/2H 美術 3 理科 4/5 SPORT 5/6 SPORT
10:00-11:00	5/6 日本語	4/5 美術 5/6 読書	1/2H PMP 1/2T 日本語 P1/K 理科 5/6 社会	P/1 PMP Prep 日本語 3 日本語	Prep 美術 1/2T 社会 P/1 日本語 5/6 SPORT 4/5 SPORT
11:20-12:20	5/6 体育 4/5 日本語 1/2 日本語 P 読書	1/2T 音楽 1/2H 体育 1/2H 音楽 1/2T 体育	Prep 理科 4/5 音楽 3 社会	RE CHOIR Junior(Lib) Senior(MPR)	P/1K 音楽 Prep 体育 Prep 音楽 P/1K 体育
12:20-13:20	4/5 体育 3 日本語 1/2 日本語 Prep- Barb P/1 読書	P/1K 音楽 Prep 体育 Prep 音楽 P/1K 体育	1/2T 理科 3 音楽 4/5 社会	1/2T 美術 5/6 理科	JILLC
14:30-15:30	3 体育 P/1 社会	Prep 日本語 P/1K Maria 1/2 社会 1/2 読書 3 美術	1/2H 理科 5/6 音楽 Prep 社会 3 Tennis	P/1 美術 4/5 理科 1/2H 読書	1/2T 音楽 1/2H 体育 1/2H 音楽 1/2 体育

4 授業の流れ

4.1 1/2 年生 — 日本語 (LOTE)

1. 見学のゲストが教室に入ったら、生徒達が一斉に「おはようございます。お元気ですか」と挨拶してくれる。そして、生徒がゲストに一人ずつ、「お名前は?」、「好きな海の動物は?」などの質問をする。

2. 「今日は三月十五日、月ようび、はれ」のころから、簡単な漢字の練習をする。
3. 先生と生徒と一緒に絵本を読む。色々な動物が登場して、「～は泳ぎます」と「～は泳ぎません」という文が繰り返される絵本。例えば、サメは泳ぎます。象は泳ぎません。
4. 絵本に登場した動物が描いている絵カードを使用して、ゲームをする。生徒2人が前に出て、先生が動物の名前を言い出すと、床に散らかっている絵カードの中から、先生が言った動物が描かれている絵カードをとる。早い者勝ちで勝負を決める。ゲームが楽しいか勝負を決めることで、生徒達がはきはきして、積極的に活動に参加している。
5. 授業中、一人の生徒が先生に呼ばれて、教室の外でボランティアと一緒に読書をする。

4.2 P/1年生 — 社会

1. 絵カードを使用し、単語（ひやけどめ・かさ・ティシャツ・ぼうし）の読み方を練習する。
2. タスクシートが配布され、先生がタスクの課題を説明してから、生徒達は色鉛筆を使い、タスクシートに色を塗り、タスク課題を遂行する。そして、ボランティアのスタッフはタスクシートを回収して、教室で採点する。
3. 授業の最初に練習した絵カードで、Q:「これは何ですか」→A:「～です。」というやりとりでゲームをする。先生の質問に正しく答えれば、所属しているチームにポイントをあげる。(P/1年生は赤・緑・青・黄の4つのチームに分かれて競争する。)
4. ひとで・かに・いるか・いかの絵カードを使用して、Q:「これは〇〇ですか」→A:「はい、〇〇です」という文型を練習する。正しく答えた生徒にポイントをつける。
5. 先生はタスクシートの課題を採点した結果を一人ずつ発表する。課題を達成した生徒にポイントをつける。
6. Q:「これは〇色ですか」→A:「はい、〇色です。」というやりとりで色の単語（ピンク・茶色・赤・青・黄色）を練習をする。正しく答えた生徒にポイントをつける。

4.3 プレップ — 日本語 (LOTE)

1. 先生が絵本を読み聞かせる。様々な動物が登場し、「〇〇は泳ぎます」「〇〇は泳ぎません」という文が繰り返し使用されている絵本。
2. タスクシートが配布され、生徒は自分で選んだ泳ぐ動物と泳がない動物の名前を書き、その動物の色鉛筆で描く。
3. 完成したタスクシートをハサミで切り、順番に重ね、最後にホッチキスで綴じる。全8ページの絵本の出来上がり。
4. 立候補により、数人の生徒が自分で作った絵本をクラスで読む。

(その他) 先生が絵本を読み聞かせたり、生徒が作った絵本を発表するというようなクラス全体での活動の際は床に座り、個人作業の際は机で行われた。この学年の他の授業と共通に設定されてい

る「海」というテーマに沿った授業内容であった。本バイリンガルプログラムのコーディネーターであるカイリー先生により、直接法で進められた。

5 見学感想

生徒が先生の日本語の指示に確実に反応していることに驚いた。現在は「海」というテーマによって全体の授業がプログラムされており、一つのテーマのもとに様々な分野へと興味を導く先生方の工夫には頭が下がった。ただ子供たちの日本語発話は応答のみが多く、私自身が子供たちと話し、聞く機会はあまりなかったため、子供たちの日本語発話能力についてあまり知ることはできなかった。指導内容が一般の小学校よりも少ないのでは・進路等に影響はないのかと心配する自分に、教育に関する自身の固執にも気がつくきっかけとなり、教育の幅広さと豊かさの可能性に気づくことができた。

(伊藤 静)

イマージョンプログラムを見学するのは初めてだったので、どのように行われているのか、実際に見学することができて、大変参考になった。子供たちの集中力を切らさないようにしておくための工夫が随所に見られ、準備の苦勞の様子がうかがわれた。また日本人ボランティアが多く在籍しており、「ボランティアの方たちの協力がなければ、このプログラムは成り立たない」という先生方の話が印象に残った。

(大塚武司)

イマージョンプログラムを採用している小学校を見学したのは、今回2度目であった。初めて見学したのは、日本での英語教育を目的とした、イマージョンプログラムを採用する学校であったので、それらがどのように異なっているか多少興味があった。教師が、習得目標の言語で話、学生がそれに対して、母語を中心として反応をするという点などは、日本人の子供も、オーストラリアの子供も一緒だなと感じた。大きな違いは、教師の配置で、日本の学校では、英語のネイティブの教師と、日本人の先生が協力していたのに対して、オーストラリアでは、日本人の教師が1人で授業を行っていた。教師に対する負荷もそれだけ大きいと感じた。しかし、ハンティングデール小学校では、ボランティアがたくさんいて積極的に授業の補佐をしていた。そのような人材は、費用が普通の学校よりもかかると言われる厳しい学校運営を支える上で、大きな役割をはたしているのだと実感した。

(小暮良幸)

テーマを設定し(例えば「海」)、それに基づく活動(例えば「絵本作り」「魚作り」)を通してことを学ぶ授業は、「内容重視」の日本語教育の実践の一例として興味深かった。また、子どもたちが興味・関心を抱きながら生き生きと授業に参加している姿が印象的であった。何かを学ぶにあたって、興味・関心というものの力の大きさを客観的に実感した瞬間であった。異文化適応能力の育成が主な目的とされ、媒介語も用いられる海外の初等・中等教育レベルの日本語教育と、バイリンガルが目的とされ、日本語のみが用いられる日本語教育の場合とでは、将来的にどのような違い(バイリンガル教育の成果)が生まれるのか、実際に長期的に観察してみたいと思った。

(柴田佳夏)

日本語による授業も興味深かったが、教室内の掲示物の充実やそれぞれの生徒に対する貸し出し用の読み物教材+テープなど、授業中のみではなく日本語に常に接することができるような環境が教師の配慮により整備されていることに感心した。日本国内で日本語を学ぶ外国人児童は日本語の生活環境ですごしてはいるが、その子供達がいやすいように配慮された日本語のリソースがない現場も多いと思う。このような海外の日本語教育現場から日本の教育現場に発信できることもあると感じた。(中野真規子)

ハンティングデール小学校を見学する前、英語と日本語のバイリンガル教育を行うというところがとても興味深かった。実際見学に行ってみたら、想像した以上に、子ども達の日本語力にまず驚いた。日本人の子どももいて学生のレベルが様々であり、話す力は多少差があったものの、日本語で行う先生の指示はほとんど理解できていたようだった(低学年や高学年に関係なく)。バイリンガルコーディネーターのカイリー先生は授業で日本語と英語を使いながら、子どもが自然に両言語を受け入れるように導かせた。例えば、算数の時間で数字を日本語で言わせたり、美術の時間で描く魚の名前を日本語で言ったりすることであった。吉野先生が担当する音楽の授業は、日本語のみで行われたが、子どもが興味を持ち、楽しく音楽の授業ができるように、日本の太鼓を使ってリズムの練習をしたり、日本語のドレミソングを踊りながら歌わせた。すべての授業が「日本語を学ぶ」ということより、「楽しく自然に身に付けられる」ことだったと思う。先生方々の授業に対する熱誠にも感心した。とてもいい勉強になった見学であった。(朴有眞)

日本語イメージンでの理科の授業がとても興味深かった。氷、バター、チョコレートの溶ける様子を実験で確かめるのだが、まず「ぐりとぐら」の絵本の読み聞かせで導入し、そこに出てきたカステラにバターが使われていたことからバター、そして氷、チョコレートの溶ける様子を予測させ、最終的には実験によってどれが一番早く溶けるかを確かめさせる。教師の説明、指示はすべて日本語だが子どもたちはほとんど理解している様子でその習得の早さに驚いた。しかし、子どもたちの興味、感性にあった授業の計画から実験の準備、手作りの教材、教具、授業中のしつけの様子などを見ていて教師には非常に多くの専門性が求められると感じた。(本柳とみ子)

研修の初日に訪問したが、朝礼が英語と日本語のバイリンガルですべてが進められている様子が非常に印象的だった。カイリー先生もおっしゃっていたが、イメージンで授業を行うのはすべてにおいて労力が2倍かかる方法だと思う。そのような苦労を先生方がなさっているおかげで成果もあがっているのだろう。先生方は子供たちを飽きさせないように、教材ややり方を工夫しながら授業を進めているのが至るところで見て取れた。またボランティアの存在はこのプログラムには欠かせないと感じた。多くのボランティアの支えがあってこそあのような手間をかけた授業が行えるのだろう。このような環境の中で日本語を自然に身につけることができるのは子供たちにとっても非常に大きな意義があると思う。(吉田裕子)

教室活動における教師の役割の論文は何本も読んだが、初めて「先生らしさ」を自分の目で確かめ、実感した。今まで「あなたは学生、私は先生」といった役割のようなことが嫌で、自分の授業

はいつも心がけて、ユーザーフレンドリーのようなスタイルに工夫している。しかし、ハンティングゲール小学校では、(学生の年齢のためもあると思う)、先生方の「私が先生だ。」という意識がとても強かった。私は驚いた。そして、思った。教室管理のため(特に年少者教育に)、こういった意識も必要なんだと。ハンティングゲール小学校で見た授業は教育というよりも、教室活動を生かした子供たちの「躰」でもあるだろう。子供たちは「スポンジ」みたいに、何でも吸収してしまうので、教室活動において教師は何をしたら良いのか、何を言ったら良いのか、どうやってクラスをリードするのかということの本質を考えなければならぬと感じた。(リユー・チャイー)

初めてのイメージプログラムは非常に興味深かった。一番印象に残ったのは、日本語の授業でも生徒達みんなが手を上げて発言しようとする積極的な姿勢である。生徒達に高いモチベーションを持たせる授業であるように工夫されていることが伺える。また、読書の時間に、絵本とテープがセットで貸し出すことができることは生徒たちにとって非常に良い日本語の資源であると思う。絵本は教科書より気楽に読めるし、カラフルな絵がたくさん描いてあるので、子供の興味を引く魅力がある。絵本を読んだり、テープを聞いたり、さらに声を出して朗読することによって、日本語の話す、聞く、読む技能を磨くことができると考えられる。(林 逸菁)